

考える」と題し、4名の先生よりご発表いただきました。討議では、会場からたくさんの質問が上がり、医療



ファッションショー

安全管理者の抱える悩みに対して参加者の共感を呼びました。医療安全管理者としての経験はその後のキャリアに役立つと語られる一方、ストレスの多い役割であるがゆえに長期にわたって専従者を任命することが難しく、いかにして医療安全管理者を確保すべきかなど、活発な意見が飛び交いました。

シンポジウム9では「多職種連携を今一度考える～本当にできているのか、そのためのマネジメントとは～」をテーマに多職種連携についてそれぞれの職種から4名の先生にご登壇いただきました。他の講演等でも何度もお話しいただいておりますが、生産人口減少に伴い、DXをうまく取り入れて対応していくこと、またタスクシフト・タスクシェアの重要性がおおいに語られました。

シンポジウム10は「地域で活躍する看護師としてのキャリア開発と人材活用」というテーマで、5名の先生方に地域で活躍する看護師を育成するためのさまざまな取り組みをご発表いただきました。討議では一施設の努力では難しいため、地域でネットワークを作る必要があること、制度構築も必要であること、流出のリスクを恐れずに活躍の場を支える心構えが求められることなどおおいに議論がなされました。

シンポジウム11では、「コロナ禍における認知症診断・治療の問題点と将来への希望」と題して、5名の先生方にご発表いただきました。病院におけるゾーニングの難しさに加え、職員のメンタルヘルスについても触れていただき、認知症患者の新型コロナウイルス対応について難渋したことなどが詳細に語られました。クリニックや在宅医療の先生方からは在宅特有の関わりの難しさと日常的な支援の重要性が述べられました。

シンポジウム12は、「EHR (Electronic Health Record) の現状と未来」と題して、医療DXの一つでもあるEHRについて4名の先生方にご登壇いただきました。

各地域ですでに進められているEHRですが、行政の助成を得るために医療以外の他団体との合意形成が必要であることや、県域から全国に展開させていくためには少しでも参加医療機関を増やす取り組みが不可欠であると発信されました。

シンポジウム13では「病院の明日を拓くDX」をテーマに基調講演ならびに実際に取り組みされているDXについて4名の先生方にご紹介いただきました。「DXは一部の人が頑張るだけでは進まない、コメディカル、事務、組織内の全員が取り組むべきことと認識しなければならない。推進にあたっては、DXに長けた若い世代の職員を中心に体制づくりをすることもコツの一つ」とご提案いただき、本学術総会にてキーワードの1つとして議論となったDXについて締めくくられました。

また、本学術総会では、会長特別企画として「公の役割、民の役割～徹底討論～」と題して、公的医療機関と民間医療機関のディスカッションを企画しました。座長の参議院議員 自見はなこ先生の他、6名の先生にご登壇いただき、コロナ禍において、それぞれの果たした役割を中心にご発表いただきました。地域差はあれ、公的病院だけでなく、民間病院もコロナ対応に尽力したことは間違いない事実であり、民間病院がコロナ患者を受け入れないという報道は情報開示について問題があったことが浮き彫りとなりました。コロナ禍で深刻な懸念事項となった高齢者の救急搬送については病院機能の集約と分散を含めて再検討する必要があると強いメッセージが発せられました。

続いて、特別シンポジウム「コロナ総括 新たな感染症への処方箋～日本の医療はどう対処したか～」ではプログラム最長150分の時間を取り、国家行政、地方自治体、大学病院、急性期病院、中小慢性期病院、クリニック、ファストドクター7名の先生方にご登壇いただきました。討議では、座長の東邦大学 館田一博教授からの「もう一度最初からコロナ対応にあたるとしたら、何が必要だと考えますか。」という質問に対し、「リスクコミュニケーション」「情報共有のシステム構築」「病院機能の分化」等の回答がありました。最後に座長の古川俊治参議院議員より、「医療DXの推進と情報共有が機能するような体制を構築することは必須であり、そのための議論を深めることこそ、現在すべきことである。」と本特別シンポジウムの意義が評価され、プログラム最後となったシンポジウムは締めくくられました。

さて、6月23日(金)のプログラム終了後には国立大ホールマリンロビーで「SDGs 医療系ユニフォーム



市民公開講座